

サルトルの状況演劇におけるキルケゴールの 「反復」について

南 コニー

はじめに

サルトルはキルケゴールの実存主義思想を「状況演劇」*1という新しい方法で大衆と共有したことで知られている。その「状況」とは、人間が、戦争や貧困、階級や時代によって条件づけられている環境を表しており、「演劇」はその中で人間が感じる心理的葛藤、抵抗や疎外の表現を通して人間の在り方を問いかける一つの呼びかけである。*2人間の自由意志と選択の問題を扱う状況演劇は、1950年代頃から盛んに上演され、日本においても唐十郎や大江健三郎など多くの作家に大きな影響を与えた。中でも『出口なし』(1944)は、今日においても世界中で上演され続けている。その背景には、戦争や格差社会、疫病の蔓延など不条理な状況が我々の生きる世界に今日も溢れ続けているという現実がある。世代を超えて上演され続け、人々に生き方や在り方を問うこのような状況演劇は、キルケゴールにおける「反復」であるとサルトルはいう。ここでいう「反復」とは単純にものごとの繰り返しを意味するのではなく、自己自身の受け取りなおしという能動的な在り方を意味している。その意味において「反復」は、ただ物事を傍観したり繰り返したりするのではなく、主体的に状況を切り拓くことが常に求められる。本論では、こうしたサルトルの状況演劇とキルケゴールにおける「反復」の関係性について考察したい。

*1 「状況演劇」(un théâtre de situations) はサルトルが自身の実存主義的な立場に基づく演劇のあり方を示した用語。

*2 サルトルによれば、人間は与えられた状況の中で自由に自己を選択する者とされ、状況演劇はこのような実存主義的な視点に基づいて創作されている。これは、自由は状況のうちには存在せず、状況は自由によってしか存在しないという『存在と無』(1943)で表明された思想を具現化した大衆的なアプローチとも考えられる。

1. 「反復」〈Gjentagelsen〉について

人間の自由と選択の問題を扱う状況演劇はある「限界状況」を設定する。状況演劇の「状況」とは、ある一つの限界状況が設定された劇の中で、登場人物が表現する心理的葛藤や疎外感を通して、観客に問いかける一つの〈呼びかけ〉であり、そうした状況の中では、目的と手段の相克、暴力の正当性、個人と集団の関係や倫理的な問いかけなど、その時代において最も懸念される問題が先鋭的な形で提示される。そして、限界状況の中で抑圧された登場人物たちが行った「選択」や「行為」を目にした観客には、自分自身の「選択」や「行為」が求められることになる。サルトルはこうした状況演劇のあり方について、次のように記している。

登場人物は幕が降りた後で現れる。それは選択の硬化であり、硬直化ではない。それはキェルケゴールがいうところの反復である*3。(強調サルトル)

サルトルの表現はいささか舌足らずのようにも思われるが、「登場人物は幕が降りた後で現れる」とは、状況演劇における真の登場人物は幕が降りた後の現実に戻された観客であり、また役者たちであるという意味である。そして、「選択の硬化」や「硬直化」とは、状況演劇の劇中の選択のすべてが登場人物に属しており、一旦幕が下されると登場人物たちの選択は彼ら自身のものとして劇中に残り、生きていく上で何かの手がかりや学びにはなりえるが、現実の世界で彼らの選択は何の意味もなさないということである。つまり、観客は現実において自ら選択し、主体的に行動することが求められているということである。それはキェルケゴールが「反復」と呼ぶものであるとされているが、それは状況演劇とどのように関係しているのだろうか。まずキェルケゴールの「反復」について見ていきたい。

1843年にコンスタンティン・コンスタンティウスの名で出版された『反復』は、思弁的な難解さはないものの、キェルケゴールの全著作の中で最もアポリア

*3 Michel Contat, *Les écrits de Sartre*, <Pour un théâtre de situations>, Gallimard, 1970. p. 684.

に満ちた作品であるとされている。それは、この著作が仮名著作であるというだけでなく、執筆中にレギーネの婚約を知ったことを機に改稿され、第二部と第三部の間に断絶があり、作品全体に不統一さが残っているからでもある。『反復』は、その副題にある通り、彼の「実験的心理学の試み」、つまり「反復」が可能であるかどうかについての考察である。『反復』の第一部はコンスタンティウスの手記であり、ある青年の苦悩と「反復の恋」、コンスタンティウス自身のベルリン旅行における「反復」について記されており、第二部は失踪した青年からの手紙、倫理的な判断中止及び『ヨブ記』について記され、改稿された第三部は、キルケゴール自身の名で書かれ、「雷雨」に象徴される「精神の反復」が扱われている。このように、異なる次元における反復が提示され、反復にどのような意味があるのかが問われているが、本書の冒頭でコンスタンティウスは、「反復」はギリシャの哲学者たちが「想起」と表現したものであり、近代哲学において重要な役割を演じる新しい概念であるとする一方で、「人生そのものが反復である」*4という基本テーゼを提示している。

反復と想起は、実は同じ運動なのである。ただ、その方向が正反対であるにすぎない。というのは、想起されるものは、すでに過去にあったものであり、いわば後方に向かって反復される。これに反して、本当の反復は、前方に向かって想起するのである*5。

プラトンの『メノン』に示されているように*6、「想起」はかつてあったものの追憶であり、過去を振り返り、繰り返されるものであるのに対して、「反復」は前方に想起するものであるとキルケゴールによって示されている。

*4 キルケゴール『反復』、柘田啓三郎訳、岩波文庫、1993年、8頁（以下、『反復』の訳は柘田訳を使用し、書名とともに頁数を示す）。

*5 *Ibid.*

*6 『メノン』では人間の徳についてソクラテスとメノンの問答が展開されているが、その中で魂は不死のものであり、幾度となく生まれ変わってきたものであるとされ、「魂がすでに学んでしまっていないものは何一つとしてない」以上、人間が「探求するとか学ぶということは、実は全体として、想起することに他ならない」（『メノン』プラトンI、藤沢令夫訳、筑摩書房、1976年、250頁）と説かれている。

またこの引用の続きには、想起は人を不幸にするのに対して、「反復はそれが可能であるならば、人間を幸福にする」*7とされている。ただし、反復の実態や、どのようにそれが可能であるかについては十分な説明がなされないまま、読者には漠然とした輪郭のみが提示されている。

この部分を次のように考えることは可能だろうか。つまり、ある過去の状況や事件を出発点とする点で想起と反復に違いはないにしても、反復の場合、個々の人間がそうした状況や事件を自らの問題として考察し、そこから自らの責任で自分の取るべき行動を選択すれば、それが幸福につながる可能性もあるということではないだろうか。そしてそれは、状況演劇を観た後の観客が、登場人物たちの選択を考察し、行動につなげていくことによって、選択の「硬化」を防ぎ、ひいては現状の打開をはかることも通じるということではないだろうか。現存在をめぐる次の一節はこうした文脈で読まれなければならない。

すべての認識は想起である、とギリシャ人たちが言うとき、彼らが意味したのは、存在するすべての現存在はかつて存在した、ということである。これに反して、人生は反復であると私たちが言うとき、それが意味するのは、かつて存在した現存在が今また現存在になる、ということである。 (強調筆者)*8

このように、かつて存在した存在が現存在になるという反復の可能性について予見していたのはライブニッツただひとりであるとされるが*9、ここでは「反

*7 キルケゴール『反復』、柘田啓三郎訳、岩波文庫、1993年、8頁。

*8 Naar Grækerne sagde, at al Erkjenden er Erindren, saa sagde de, hele *Tilværelsen*, som er til, har været til, naar man siger, at Livet er en Gjentagelse, saa siger man: *Tilværelsen, som har været til, bliver nu til.* (A,33) このサルトルにおいては *réalité humaine* : ドイツ語の“Dasein”の訳で現に存在する人間、人間的現実であるが、ハイデッカーの Dasein「死へと関わる実存的な存在」(Existenziellen Sein sum Tode)とはニュアンスが多少異なる。

*9 ライブニッツは『人間知性新論』ですべての認識は想起であるというソクラテス・プラトンの説を批判している。

復は発見されなければならない新しいカテゴリーである*¹⁰」と提示されている。この「反復」についてキルケゴールは、実はそれがこれまで誤って「媒介」と呼ばれてきたところのものに他ならないと指摘しつつ、ここではヘーゲルの用語〈Vermittlung〉やその英訳の〈Mediation〉や仏訳の〈Médiation〉という言葉をあえて使用せず、デンマーク語で反復を意味する〈Gjentagelsen〉を使用している。

媒介 (Mediation) は外来語であるが、反復 (Gjentagelsen) は立派なデンマーク語である。こういう哲学用語をもっているデンマーク語に私は祝辞を呈したい。媒介はいかにして生じるのか、それは二つの運動から出てくるのか、どういう意味でそれはこれらの契機の中にすでにあらかじめ含まれているのか、それともそれは何か新しいもので、あとから付け加わってくるものなのか、それなら、どうしてそうなるのか、こういう問題は今日では説明されない。この点については、近代的な「移行」の範疇に相応するギリシャ的な運動概念の考察の方が、はるかに注目に値する。^{*11}

デンマーク語の反復〈Gjentagelsen〉に相当するドイツ語はWiderholungであり、英語ではRepetitionである。デンマーク語のGjentagelsenには「取り戻す」及び「繰り返す」の二つの意味がある。この概念には、アリストテレスのキネーシス（可能性から現実性への移行）など変化の要素が含まれており、発見されなければならないものだとされている。『反復』の第一部と第二部で語られる青年からの恋愛相談や手紙の中では「反復」は「想起」のような追憶とは違い、勇気があるものであり、反復を理解しない者は生きるに値しないと記されている。つまり、この青年の物語の解釈は、一方では未知の未来に向けられた希望と、失われたものに向けられた記憶との間で、人間が常に板挟みになっているという事実を指摘している。このように反復が不可能な青年に代わり、コンスタンティウスは自ら反復を試みるために、昔行ったベルリン旅行で

*¹⁰ 原文は Gjentagelsen er den ny Kategori, som skal opdages. (A, 33) である。

*¹¹ キルケゴール『反復』、44-45 頁。

最高の思い出の場所であった首都劇場に再び足を運ぶ。

次の日の晩、私はまた首都劇場へ行った。繰り返された唯一のことは、反復が不可能だということだけであった。(…) というのも、私は反復(= 取り戻し) は存在しないということを発見したのだが、実はこのことをあらゆる仕方で繰り返すことによって確信したのだから。^{*12}

ベルリン旅行はもはやかつてのベルリン旅行ではなく、以前心の高ぶりを感じた劇場や通りやレストランに赴いても、決して往時と同じ気持ちを感じることができないということを、コンスタンティウスは何度も Gjentage した(繰り返した)にもかかわらず Gjentagelsen (反復=取り戻し) が可能でないことがわかったと書いている。ここではデンマーク語の「繰り返す」と「取り戻す」という両方の意味をもつ動詞 Gjentage と、「繰り返す」と「取り戻すこと」を意味するその名詞形 Gjentagelsen の両方を用いつつ、「繰り返す」ことで「取り戻す」はできないという「反復」の不可能性が強調されている。つまり何度同じことを繰り返したとしても、全く同じ経験を二度とすることはできず、かつての感動や高揚を経験する(取り戻す)ことも決してできないということである。

私は三十分ほど我慢した後に劇場を出て考えた。反復などありはしないのだと。このことは私に深い印象を与えた。^{*13}

青年同様、コンスタンティウスもまた反復が不可能であることに気づき落胆する。二つの例を整理すると、若者が反復しようとするのは恋愛事件によって

^{* 12} *ibid.* pp. 69-70. Den næste Aften var jeg i Königstädter-Theatret. Det Eneste, der **gjentog sig**, var Umuligheden af en **Gjentagelse**. (….) thi jeg havde opdaget, at **Gjentagelsen** slet ikke var til, og det havde jeg forvisset mig om, ved paa alle mulige Maader at faae det **gjentaget**. (強調執筆)

^{* 13} *ibid.* 148 I en hal Time holdt jeg ud, da forlod jeg Theatret og tænkte: der er slet ingen Gjentagelse til. Dette gjorde et dybt Indtryk paa mig.

喪失してしまったかつての自己である。青年が自分の人生で直面していた問題は、彼が恋に落ちた少女と結婚するか、それとも彼の内なる召しに従って詩人になるかであったが、彼は詩人になるきっかけを与えてくれたその少女には、もはや惹かれなくなっていた。彼は少女と離れ、書くことによってかつての心酔を反復しようと試みるが挫折する。本書はレギーネとキルケゴールの関係を解説する鍵になると考えられているが、ここにはレギーネに対するキルケゴール自身の挫折もみてとれるだろう。先述したように、コンスタンスもまたベルリン旅行で反復の挫折を味わっていた。両者に共通するのは、かつてあった存在や場所、過去の追憶を辿る想起により反復の不可能性を経験するという点である。ここに反復のあり方を仄めかされただけの読者は、この両者の試みを読み進めることで、「反復」が如何に可能であるのかを自ら考えるように求められている。そしてその手がかりは、本書で言及されている『ヨブ記』に記されている。ヨブは不条理にも神からすべてを奪われてしまうが、幸福を与える神は不幸をも与えると、立派な信仰者としての「答え」を見出す。しかし、この物語はこの答えで終わらず、この答えをわがものとするための苦闘とその苦しみに寄り添い、共有してくれる神の存在こそが答えとなり、失ったすべてのものを再び与えられる。

ここでヨブの物語は、神の存在と信仰を契機に、失ったものすべてが取り戻されること（反復）を意味している。

第三部では、著者コンスタンティウスに代わり、キルケゴールは突然自身の名前で、「私は再び私自身に戻りました。この点で、私は反復を手に入れたわけです」*14と書く。これはベルリンから戻ったキルケゴールが、レギーネの婚約を新聞で知って癲癇を起こし、新聞を取り落とすほどの衝撃を受けた後に書かれた一文である。これは自分を失いつつ自分を取り戻す、かつて存在した現存在が今また現存在になる、ということを表している。まさにヨブのように、一度神に全てを奪われることで、苦闘を生き、信仰を拠り所に再び自分を取り戻し、再び現在に存在する可能性が開けるということではないだろうか。キル

* 14 Jeg er atter mig selv; her har jeg Gjentagelsen (SV I III, (Pap. IV B 97,1-) *Gjentagelsen*, 184, Af Constantin Constantius)

ケゴールは次のように続けている。

この世では、精神の反復のみが可能なのです。もっとも精神の反復といえども、この現世においては、真の反復である永遠の世界におけるほど完全ではありません。^{*15}

人間に可能な反復と神にのみ可能な真の反復を区別したキェルケゴールではあるが、少なくとも精神の反復だけは人間にも可能と認めている。ただし、その不完全な反復でさえもどのように可能かという方法は明かされていない。反復が可能であるかどうかを試すためにベルリン旅行に出かけたコンスタンティウスとキェルケゴールの違いはどこにあるのか。コンスタンティウスにおいては、反復の可能性という最も内面的な問題が時間や場所を含め外的な要素に依拠しているのに対して、キェルケゴールにおいては、個人の内部において見出されている。つまり、コンスタンティウスのベルリン旅行も青年の恋愛の場合も、かつて自分の外部にあったもの、時間、存在、場所の反復（想起）を繰り返そうとしているのに対し、キェルケゴールの場合は、雷雨に打たれるほどの喪失の試練で自己の内部が引き裂かれ、自己と自己との分裂の統合を試みることで反復（自己の受け取り直し）が可能になるのである。

次にこの自由の反復、自己の分裂とその取り戻しに関するサルトルの受容について考察したい。

2. サルトルにおける「反復」の受容

1961年の『主体性とは何か』と題された？ローマでの講演でサルトルは反復について次のように述べている。

過去を想起可能な思い出の総体だと見なすことは、過去を受動的な何かに還元してしまうこと、つまり自らの前に置くことができ、それについ

^{* 15} *Ibid.* Her er kun Aandens Gjentagelse mulig, om den end i Timeligheden aldrig bliver saa fuldkommen som i Evigheden, der er den sande Gjentagelse.

て「こんなこともあったし、あんなこともあった、あれこれが起こった」などと言うことができる諸々の対象＝客体の総体に還元してしまうことです。こうなってしまうと、そのような過去はすでにもはや私ではなく、準－私になる。過去というものがそれにたいして距離を置ける可能性としていつも存在するためには、過去は絶えず再全体化される必要があります。言い換えると、反復という主体性の恒常的な側面が必要なのです。人は絶えず自らを再全体化するがゆえに、絶えず自らを反復するのです。^{*16}

サルトルは、ここで過去が客体の総体として現れる想起は「準－私」であり、それが可能性としての「私」であるためには主体性の不断の再統合が必要であると理解している。こうしたサルトルの理解をもとに『反復』を見てみると、かつてのベルリン旅行の追体験（客体の総体）は、コンスタンティウスの「準－私」であり、キルケゴールの精神における反復は主体性の内部の分裂と自らの再統合であるということがいえる。また、反復は反復と呼ばれているかぎり、新しいものではなく、かつて存在したものの反復であり、かつて存在したという事実が、反復を新しいものにするキルケゴールが述べているが、サルトルは「人間は無限に自分自身を反復すると同時に自分自身を創出する（invention）する」という事実そのものによって絶えず新しいことを試みる」存在であるという。それではこの主体性の創出とは、どのようなものだろうか。その例をサルトルの状況演劇『出口なし』を例に見てみたい。

『出口なし』の原題〈*Huis clos*〉は元来「非公開審理」を意味する法律用語である。本作は、男性一人、女性二人の三人の登場人物が謎めいた部屋（第二帝政式サロン）に通されるところから始まる。そこは死後の世界であり、三人の死者たちは、共にこの部屋で永久に閉じ込められるという罰を受ける。かの有名な一節「地獄とは他人のことだ」は、本作を出典とする。劇中で三人（ガルサン、イネス、エステル）は、お互いの過去を聞き出し、なぜ三人が同

* 16 J.-P. Sartre, <<*Les Temps Modernes*>>, No.569, Mars, 1993. p. 33. (強調執筆) ここでいう再全体化とは有機的な弁証法であり、自らを保ちつつ自らを否定し、自らを乗り越える一つの自己のようなものである。

じ部屋に入れられたのかを探ろうとする。昼も夜もない部屋で、三人は自らの過去を振り返りつつ議論や喧嘩を繰り返す。場面設定が最後まで変わらない劇中では、「なぜ私たちは、地獄に墮ちたのか。それを知らなければならない」という主題が繰り返し喚起される。それぞれの自白が続くが、三人の状況は解決されないまま永遠に続き、文字通り「出口なし」の状況のまま幕が下される。しかし、実はこの部屋に閉じ込められた三人が状況を打開できるチャンスが一度だけ第三幕に訪れていた。なぜならガルサンが執拗に叩き続けたため、ずっと開かなかった部屋のドアが突然開いたからである。しかし、三人は呆然としたまま、部屋から出ることを恐れ、あれほど外に出たかったにもかかわらずドアを再び閉めてしまう。そして長い沈黙の後、この第三幕は終わる。

観客は、ここで、なぜ出口のドアがやっと開いたのにもかかわらず、誰も部屋（地獄）から出ようとしなかったのか、この長い沈黙は何を意味するのかと問わずにはいられない。つまり、変わろうとすれば変わることができた瞬間に、変わろうとしないのはなぜか、変われないのはなぜか、変革できる者と変革できない者との違いは何かということをも主体性の問題としてサルトルは観客に呼びかけている。サルトルはこの『出口なし』について、後に次のように解説している。

自分が変えようもしない判断や行為に、絶えず心を痛めるというのは生ける屍である。それ故、実をいえば、生きているわれわれにとって自由の大切さを、帰謬法によって証明したかったのである。すなわち、ある行為を他の行為によって変える自由である。われわれが現代、どのような地獄に生きているとしても、われわれはそれを自由に断ち切ることができる。私は考える。従って、それを壊さない人々がいるとすれば、彼らもまた自由にそうしているのである。つまり彼らは自由に地獄にいるのである。^{*17}

つまり「主体性の案出」とは自由の問題に他ならない。まさに「登場人物は幕が降りた後で現れる。[……] それはキェルケゴールのいうところの反復であ

^{*17} J.-P. Sartre, <<Les Temps Modernes>>, No.569, Mars, 1993, p. 56.

る」という意味において観客各々の意志と判断、自由と行動が問題とされている。では、ある状況において「主体性の案出」が可能な者と、そうでない者との違いはどうだろうか。まず、サルトルにおける主体性について見てみよう。サルトルは「主体性とは外部であり、何らかの反応の性格という意味で、また構成された対象である限り、対象の性格という意味で、外部である」*18とローマでの講演で述べている。この主体性が外部であるという考察について、サルトルは次のような一人の労働者の例を引き合いに出している。ある共産主義労働者は、ある仲間に対していつも嫌悪感を抱いていたが、それがなぜかわからずにいた。あるとき彼は、その仲間がユダヤ人だからだ、ということに気づき、自分が反ユダヤ主義者であると自覚する。

なあ、ようやくわかったぞ。実のところ、常日頃からお前が気に入らなかったのは、おまえがユダヤ人だからさ。今ようやくわかったんだが、それは俺が十分にブルジョワ思想の残滓から解放されていなかったためだ。俺にはよくわからなかった。だけど、お前という実例が理解を助けてくれた。気づいたのさ。俺が嫌っているのは、お前の中のユダヤ人なんだが、それはおれが反ユダヤ主義者なためなのだ。*19

この気づきは、この労働者の内部に大きな分裂を与えた。もし仮に自分が反ユダヤ主義者であると認め、そうあり続けるのであれば、彼は共産主義労働者ではいられない。反ユダヤ主義と平等で平和な社会を実現しようとする共産主義の人道主義は共存できないからである。価値の観点からいえば、反ユダヤという排外主義的な思想を自分の中に認めたとしたなら、仲間の同志達と価値を共有する人間ではないという結論に導かれる。そして、もし自分は共産主義労働者であると認めた場合、同志から非難されるか、自分自身を非難するかといった選択をしなければならない。つまり、この反省的意識の自覚は、自分自身が共産主義者であることと、反ユダヤ主義であることとの間で葛藤を引き起

*18 澤田直・水野浩二『主体性とは何か』、白水社、2015年、47頁。(強調執筆者)

*19 同、41頁。

こすことによって、自らのうちに残っていた矛盾を乗り越えようとする（彼の中の反ユダヤ主義を対象＝客体へと移行させる）ことを意識させ、差別主義者であることをやめるという主体的行動を促すという意味で、自己の再全体化である。また、「ユダヤ人を対象＝客体として捉える主体＝反ユダヤ主義者」と、「自らを反ユダヤ主義者という対象＝客体として捉える反ユダヤ人主義者」との間の関係の違いが教えてくれるのは、主体的なものを認識することには、主体的なものを打ち壊すような何かがあるということであり、「主体性が外部」であるということである。『出口なし』のガルサンと反ユダヤ主義労働者を比較してみると、ガルサンは、死後の世界から永久に過去を想起している（追憶）人間であり、地獄に落とされた理由を認めず、同じ部屋に閉じ込められているエステルとイネスという二人の他者を使って自己を正当化し続ける。また閉じ込められている部屋（地獄）の扉が開くことを望みつつ、いざ扉が開いたら怖気付いて扉の外に出ようとしな。そして彼は、過去を振り返り（想起）、同じ状況で同じことを永遠に続けることで反復が可能でないことを示している存在である。つまりガルサンには、主体性の創出（invention）をする勇気が決定的に欠けているため不自由なままなのである。他方、共産主義者を自認しながら反ユダヤ主義者であった労働者は、なぜ自分がある仲間のことが嫌いなのかを自問し、自分が反ユダヤ主義者であると自覚する。そしてこの自覚を通して、反ユダヤ主義である自分と共産主義者である自分の矛盾に気づき、どちらか一方の立場をとるように自分を動かす（主体的行動）。つまり分裂した内部を再全体化することにより、かつて存在した現存在が今また現存在になる、という自ら再び受け取り直すこと Gjentagelsen（反復）を表している。反復が主体性の創出をするかどうかは各々の自由に委ねられているということである。キェルケゴールはヴィギリウス・ハウフニエンシスの仮名で書いた『不安の概念』に付けた長い脚注で、『反復』が人々に理解されていないこと、コンスタンティウスの例を用いることで何を伝えたかったのかを補足説明している。

自然の領域では、反復は、そのゆるぎない必然性においてある。精神の領域では、課題は、反復に変化を生じさせて、幾分でも反復のもとで居心地

良くさせ、あたかも精神が、精神の反復に対してあたかも外面的な関係に立つかのようにさせる（その結果、善と悪とは夏と冬のように交替することではなくて、むしろ課題は、反復をなにか内面的なものに変えさせること、反復を自由の本来の課題に変えさせ、いっさいが交替するなかにあつて、自由が本当に反復を実現しうるかどうかという自由の最高の関心に変えさせることである。^{*20}

そこでは、反復を内面化すること及び反復を自由本来の課題に変えさせることこそ重要とされている。反復を主体性の創出、つまり自由の問題として捉えているサルトルはキルケゴールとの関係を次のように述べている。

キルケゴールは、彼独自の意味においてではなく、私の「冒険者－存在」の水準において、私が外部から私に到来する出来事であるべきかぎりにおいて、私の冒険として復元される。歴史が、われわれの行為の印の担い手としての事物によって普遍化され、人間の新たな誕生の一つ一つによって単独的な冒険となり、この冒険のうちに歴史が自己の普遍性をたたみこむかぎりにおいて、死者キルケゴールは、生者になることができる。というのも、彼は、あらかじめ、いまだあらぬ私であったからであり、私は、別の歴史的諸条件において、キルケゴールをふたたび繰り返かえすからである。^{*21}

下線で強調した部分は、キルケゴールの言葉を借りれば「かつて存在した現存在が今また現存在になる」という反復であり、言い換えると、人は絶えず自らを再全体化するがゆえに、絶えず自らを反復するということを表している。

ところで、神を媒介するキルケゴールの反復と無神論者の神を介さないサルトルの反復は同じものだと理解できるのかどうかという疑問が残る。最後にサ

^{*20} キルケゴール『不安の概念』、キルケゴール著作集 10、水上英廣訳、白水社、1975年、29頁。

^{*21} サルトル『生けるキルケゴール』、松浪信三郎他訳、人文書院、1967年、48頁。（強調執筆著者）

ルトルにおける神の問題に触れておきたい。アルザスで育ったサルトルは、カトリックであると同時にプロテスタントであり、子ども時代には信仰をもっていた。^{*22}しかしやがて教条的な宗教の教えに対して距離をおくようになる。それは、エミール・コンブ内閣による政教分離政策の影響や祖父母の宗教への無関心の影響があったという。^{*23}だが、信仰を持たないことをあからさまに表明する事は暴力的で下品であり、無神論者とは変わり者を意味していた。サルトルは「無神論者」について次のように記している。

無神論者は自分の行動の純粹さによって理論の正しさを証明しようと努め、自分自身と自分の幸福を犠牲にし、癒されて死ぬ可能性を自ら放棄している。神の不在をあらゆるところに見出し、神の名を発することなしには口を開くことのできない、いわば神に関する偏執狂なのだ。要するに無神論者とは、宗教的確信を持った人なのであった。それに対して信者たちのほうはまるで宗教的確信を持っていなかった。^{*24}

サルトルによると、無神論者を公言する人とは「不在の存在としての神」に囚われている人である。このような無神論者は観念的無神論者とされるが、サルトル自身この観念的無神論から唯物論的無神論への移行は困難であると記している。観念的無神論とは、神の観念の不在であり、拒否であり抹殺である。しかし、あくまでも神の観念はそこに存在する。一方、唯物論的無神論とは、神なしに世界を見るということであり、ある観念の不在から新たな存在観への移行、つまり事物が事物のまま存在し、事物を存在させる神の意識の中に

^{*22} 「私はカトリックであると同時にプロテスタントだったし、従順の精神と批判精神と結びつけていた。しかし結局のところ全てはとても退屈だった。無信仰になったのは、理論同士の衝突のためではなく、祖父母の無関心の為だった。そうは言っても私は信仰していた。寝間着姿で寝台の足下にひざまずき、手を合わせて毎日お祈りをした。だが、神様の事は次第に考えなくなった」(サルトル『言葉』、澤田直訳、人文書院、2006年、78頁)。

^{*23} 「私は聖史、福音書、公教要理を教わったが、信じることは教わらなかった。その結果、無秩序となり、それが私の個人的な秩序となった」(*Ibid.* p. 199.)。

^{*24} *Ibid.* p. 76.

捉われない存在観である。ここで、注意しなければならないのは、たとえ神を信じていなくても、神の観念の諸要素が人々のうちにあり、神的な側面を伴った世界観でものを見ているということである。よって「反復」を考察するにあたり、キルケゴールにおいては、「神の存在」を媒介として可能になる反復は、一度失ったものを再び受け取り直す過程であり、サルトルにおいてそれは、自己を失いつつ絶え間ない自己の創出の過程で再び自己を取り戻すプロセスであるといえるのではないだろうか。このようなキルケゴールとサルトルにおける反復の有神論、無神論的なあり方の差異については今後の研究の課題とさせていただきます。

まとめ

状況演劇の「状況」とは一つの〈呼びかけ〉であり、その時代において懸念される問題は、幕が降ろされた後に観客自身の判断に委ねられる。サルトルによるとこれがキルケゴールの「反復」に他ならない。『反復』では、「想起」と「反復」の違いが明示され、反復不可能な例（青年の恋、ベルリン旅行）と精神の反復（キルケゴール自身）の両方が記されている。しかし、「反復」が可能な例については、その全容を掴むことはできず、間接伝達によるアポリアのみが残されており、各々が自ら経験するかぎりにおいて到達可能な領域となっている。サルトルは、状況演劇の代表作である『出口なし』で、状況を変えるチャンスを掴まず、結局何もしないガルサンの例を出しつつ、幕が降りた後で観客は自ら自分の答えを出すように仕向けられている。そしてまた「変わる」、「行動する」ということに必要なのは、自己矛盾、葛藤を掘り下げることだと反ユダヤ主義者の労働者の例で示している。ここで重要なのは、自分で意識しておらず、認識してもいなかった主体性が何かのきっかけで意識され捉えられることで自己自身が創出され、そのことによって人は変わらざるを得ないという点である。それこそが、キルケゴールがいう「かつて存在した現存在が今また現存在になる」ということである。サルトルは「人は神経症からは解放されることはあっても、自己から治癒することはない」*25と述べているが、ある状

*25 サルトル『言葉』、澤田直訳、人文書院、2006年、203頁。

況において自己分裂を経験し、それを能動的に統合し続けることによって人は反復が可能な存在であるとサルトルは劇作品を通して伝えようとしていたと考えられる。